



横断歩道での光景

防府の街を巡視している時に、気になった横断歩道での出来事を2つ紹介します。これを読まれて皆さんはどのように考えられるでしょうか。

【例1】

横断歩道から数メートル離れたところを、子どもの手を引いて道路を横切ろうとしていた母親がいました。

「お母さん、危ないですよ。横断歩道を渡りましょう」（私）

「こちらのほうが近いので・・・」（母親）

「でも、横断歩道を渡った方が安全ですよ」（私）

「お母さん!」（子ども）

「行くよ」（母親）

子どもは、母親の袖を引っ張って、横断歩道を渡ろうと母親に伝えようとしたのでしょうか。でも残念ながら、母親はその声を無視して、子どもを連れて行ってしまいました。



【例2】

横断歩道の信号機が赤で立ち止まっていた時、前から歩いてきた高校生がそのまま渡ろうとしました。

「信号機は、今赤だよ。渡ってはいけないのではないかな」（私）

「今、車が来ていないから渡ってもいい」（高校生）

「でも、ルールは守らないとね」（私）

「今、急いでいるのだから」（高校生）

高校生は、そのまま渡り終えました。私が声をかけた時に、なぜ自分はこのようにことで注意をされなくてはならないのだと思ったのでしょうか、良くない表情をしていました。

例1、子どもは、母親に対してどのような思いを持ったのでしょうか。学校で「横断歩道を渡りましょう」と習っているのでどうするのがよいのかは分かっているはずですが、だから母親の袖を引っ張ったのでしょうか。この子は、横断歩道を渡らなかったことに対してどのように感じたのでしょうか？母親を『反面教師』として捉えるのでしょうか、大人は仕方ないと捉えるのでしょうか、正しいことをするのは無駄なことだと捉えるのでしょうか、きっと複雑な思いを持ったことなのでしょう。母親のちょっとした行動で子どもの道徳観がゆがめられてしまいそうです。

例2、高校生は、正しいことをすることを放棄しているようにみえます。ひょっとして、小さいときに親に例1のようにされた経験があるのかもしれません。彼は、横断歩道だけでなく、他の場面においても正しい行動ができないのでしょうか。そのようなことがないことを祈るだけです。

ルール（社会規範）を守らなければいけないことは誰もが分かっています。でも、守る人と守らない人がいます。明るく、生活しやすい社会にするためには、みんながルールを守らなければなりません。

ルールを守る子どもに育てるためには、小さいときから親や大人が口で言うだけでなく、自分の態度で示すことが一番効果的な方法でしょう。まさに「親は子の鏡」なのです。子どもにとって、ルールを守るカッコよいお父さん、お母さんになりたいものです。

横断歩道を渡り終えて、ぺこりと頭を下げて運転手の方に礼をする素敵な子どもがいます。そのような子どもがたくさん増えてくるといいと思います。

問合せ先：防府市教育委員会生涯学習課 青少年育成センター（23-3013）